

岐宿城跡

福田 一志

1. 岐宿城の概要

岐宿城は南松浦郡岐宿町字城嶽に所在する。岐宿町は五島列島最大の島である福江島の北側にあり、遣唐使の最後の寄港地として知られる三井楽の東に隣接する。岐宿城は城嶽という標高216mを測る峻険な山上にあり、東に岐宿港、西に白石浦という良港に挟まれ、東北東には舌状に延びた低平な溶岩台地が展開する。この溶岩台地上には岐宿貝塚・鰐川貝塚・茶園遺跡など旧石器時代から弥生時代までの大きな遺跡が集中する箇所としても知られ、山海の幸に富める肥沃な土地柄である。また、城嶽の東北東に延びる台地は、玄界灘に突き出し、両裾に奥深い湾を控えることから、貿易上の拠点としての構えをみせるが、物証や文献的な裏付けはいまのところない。

2. 岐宿城沿革

『五島家譜』によれば、弘和三年（1383）宇久氏が宇久の居館である山本館からこの地に移り五島を統一したということが記載されているという。岐宿城の報告にも「弘和3年（1383）、8代宇久覚公が岐宿に上陸、城を築き、滞陣4年にして福江に移る」と記載している。新魚目町郷土誌によれば、宇久覚の子、勝は応永二十年（1413）に深江（福江）に移り辰ノ口城を築いたとある。ただし、年表では嘉慶一年（1388）に福江に居を移すとしており年代的に混乱が見られるようである。先の『五島家譜』でみれば、岐宿への宇久氏の入部後、辰ノ口城、江川城、近世後期の石田城へと引き継がれて行くことになるが、宇久氏の五島統一の第一線がこの岐宿城であったことについてはどの郷土誌も一致するようである。ただし、『日本城郭大系』によれば、「宇久氏は少なくとも応永二十年（1413）当時までは宇久島にいたものと思われる・・・（岐宿城が）宇久氏によって築城されたのであれば、当然、その築城年代も・・・さらに後代のこととなる。」としている。『日本城郭大系』では、応永二十年に宇久勝が辰ノ口城に入部したとみており、これが宇久氏の五島入部の最初とみているようである。ただし、『五島家譜』によれば宇久勝が辰ノ口城へ入ったのは嘉慶二年（1388）としている。宇久氏の五島入部が応永二十年とする説は、応永二十年の五島の住人等の一揆契諾状などから、宇久勝が五島の諸豪族を統括する立場になったことを示して以後、福江の辰ノ口城に移ったとする説をとっているようである。ただし、五島住人の一揆契諾状は永徳四年（1384）にも発給されていることから、宇久氏の岐宿入部は弘和三年の時期であった可能性が高いと言わざるを得ない。ただし、宇久氏が岐宿侵攻後、代官などを派遣していた可能性も否定できない。宇久氏の福江島への入部の時期については、その後の五島の歴史を知るうえで、大きな意味をもっていることから今後さらに文献から宇久氏の動向を探る必要がある。

3. 岐宿城の調査

1981年に岐宿町教育委員会により調査がおこなわれている。以下、調査報告の内容か

らまとめると、遺構としては石塁が大半を占め、付帯遺構として木戸口と思われる地点から検出された柱穴状遺構・石塁に沿って走る「連絡通路」・出曲輪・溜池等を検出している。木戸口から始まる石塁の計測可能な総延長は358.8㍍で本丸（頂上部）の西側に南北に連なっており、石塁は基底部のみのものから、場所によっては2㍍を越すものもあるとしている。築石の手法として野面積をおこなっていることから、「年代を感じさせる」と記載される。木戸口と考えられる柱穴については冠木門跡の柱穴とし、石塁に沿った連絡通路は石塁の背後に一段凹みをつけ幅員1㍍を保つ。出曲輪については二の郭三の郭に区別することができるが具体的にどこを指すのか理解できない。石塁の中に「岐」と陰刻したものが検出され、断定は避けてはいるものの風化の激しいことから弘和三年（1383）の陰刻とみて無理がないとしている。これらの遺構に対しては調査者も懐疑的な部分をもっているが、最終的には弘和三年頃のものとの考えを示している。この調査に関して私なりの所見を言うならば、石塁としたものと本丸との在り方があまりにも不自然であるということ（註1）、いかにして木戸口と最初に断定したのか（ピットが2つだけで木戸口になるのか）等々大いに疑問を持たざるを得ない。特に石垣遺構の調査が主体になっている感がする。城そのものの存在は否定できないと思われるため調査範囲を広域に設定し、さらなる遺構・遺物の検出をおこなう必要が在ろう。郭とされるところや、本丸とされる頂部の調査が望まれ、そこから出土する遺物なども検討し総合的な判断が必要と思われる。宇久氏が最初福江島に入部し、それ以後の五島の中・近世の歴史の土台として、この岐宿城をどのように捉えるかが今後の大きな課題と考える。

【註】

註1 通常石垣等の遺構は等高線上にしかも本丸を取り巻くことにより、防御用として築かれる。石塁とされるものは本丸の北東から南東に直線上に延びており、本丸とされる頂上部を意識しておらず、むしろ避けた状況を呈すると思われる。

【引用・参考文献】

- 外山幹夫編 1980 『日本城郭体系』17 新人物往来社 長崎・佐賀
荒浜 茂 1982 「3 調査の概要」『岐宿城遺跡確認調査報告書』岐宿町文化財調査報告書第1集
新魚目町教育委員会 1986 『新魚目町郷土誌』 p96, p956